

エロレタノアト



70.58 NO.44

革命的共産主義者同盟
才四インター日本支部
関西地方委員会

インドシナ反帝武装斗争勝利カンボ ジア侵略北爆再南アアジア会議粉砕

インドシナ半島から米帝
をたたきだせ!

カンボジアへの公然たる侵略の開始に引き続き、五日一、二日北爆を再開した。これはいさなも突発的事態ではない。七〇年より開始されたインドシナ半島の全情を専ら導き出される鉄の道理以外何者でもない。我々の成すべきことは、米帝の再度の侵略拡大に對して、決定的に打撃を与えるべく戦い抜くだけである。

オニ次大戦直後、オニ次アジア革命の嵐は中東革命を起し、インドシナ全域、アラビヤ半島、インドネシア、フィリピン、朝鮮と全東アジアへと波及しつづつあつた。一九三〇年代の反動の時代を大長征により往きのが中東革命をその源泉として、東アジア植民地革命は攻めに転じつづつあつた。この地域の支配者イギリス、オランダ、フランス、日本帝國主義はオニ次帝國主義戦争によりあるものは大きく力を衰えさせるが、又あるものは増強した。この植民地革命の永続的發展に對して、旧西ヨーロッパ、日本帝國主義等に代つて東アジアの最後の帝國主義体制の守護者として登場したのが、アメリカ帝國主義であつた。オニ次大戦でその力を枯渇せざるをすすすその力を貯え、文字通り世界帝國主義として登場した米帝は、その膨大な物質力を動員して、この東アジア植民地革命の永続的發展に排戦した。この革命と反革命の衝突は、朝鮮戦争、インドシナ戦争として斗われた。

米帝は、中東革命そのものを、そして北朝鮮、北ベトナム、労働者國家そのものを粉砕することはできなかった。膨張する東アジア革命の波を押しどめ、封じこめることに成功した。インドシナ、マレーシア、フィリピン、朝鮮の植民地革命は一時的に鎮圧せられた。朝鮮の労働者國家を包圍する南ベトナム、台湾、フィリピン、南朝鮮、沖縄という東アジアの軍事帝國主義体制を築きあげた。ここに東アジアにおける革命と反革命のこう着状態、力による平和共存体制が成立することになった。ジコネーヴ決定こそまじくこの反映であつた。労働者國家中国の毛東指部は東アジアにおける植民地革命の永続的發展を放きして、「平和五原則」の路線に入つていった。ここに東アジアにおいて大戦以後の典型的な戦後体制が成立するのである。このように形成されたアメリカの軍事帝國主義体制が余りにも強固であつたが故に、だれもあえてこの体制に正面から斗いを挑む者はなかつた。運動は全体として、この帝國主義の支配体制の緩和を求めるのに限定されてきた。一九六〇年南ベトナムで達成された民族解放戦線(FNL)が始めて、しかも唯一この米帝の軍事体制に挑戦を開始した。世界最大の物質力を背景にしたアメリカ帝國主義の軍事力に抗して、この「小国」の人民は不屈な斗志で斗い抜いた。中東労働者國家指部のけボタージュの中で、南ベトナム人民は

北ベトナム労働者國家の指部を次第に自らの側に引き寄せ、南北ベトナム人民の一体となつて斗争を実現した。アメリカ帝國主義はこのベトナム革命を圧殺するどころか、膨大な出血を強いられ、その力を始めて枯渇せられた。ベトナム革命が戦後久しく続いてきたアメリカ帝國主義の世界支配体制に始めて痛烈な打撃を与え、その体制の崩壊の端緒を作り出したが故に、世界革命の中心であり、我々の運動の一切の力の源泉である。

一九六八年デトロイトを契機としてベトナム革命は明確に攻めに転じた。六五年を契機とした米軍の大量介入により自己の力を枯渇させてしまった米帝は短期決戦の展望を放きざるを得なくなり、防衛的長期戦の布陣をせざるを得なかつた。一方ではこのような長期戦体制をせざるを得なかつた米帝は北爆停止と部分撤兵により、北ベトナムの発展を引きだそうと試みてきた。しかし、戦場を失つたものをテールの上で取り戻そうとつづつこの「虫の良」は居るは完全に粉砕された。

米帝のこの防衛的長期戦体制は、ただベトナム革命のインドシナ半島への拡大を許しただけであつた。七〇年初めのラオス愛国戦線(パデト、ラオ)のジャール平原制圧はまさにこのことの反映であつた。インドシナの土着反革命勢力と米帝は、も早事態をこのまま放置することはできなくなつた。

帝國主義の側はまずカンボジアから攻撃に手を付けはじめた。これに先立つて、カンボジアのアヌークボナヘルテラスト体制は、このインドシナ半島全域への革命と反革命の全面対決の入り口勢の中、この体制の危殆を察めていた。この革命と反革命の衝突からカンボジア一國を隔離し、国内の左右両派の間の綱渡りを演じてきたシアヌークはこの同左派を弾圧を加えることによつて、この体制の延命をはかりうとしてきた。しかし、このおラフインドネシアのヌカルノ体制末期に類似したボナヘルテラストの政策は、左右派を有利にしたものではあつた。米帝に後押しされたカンボジア土着反革命勢力は時を物さずクーデターを遂行し、おラシの反革命政權をデッチあげた。南ベトナムFNLに反對する「官製」モロに引き続くロン、ノル・シリク、ヌタク一派のクーデターといった事態の推移は、これを極めて意識的な帝國主義側の企てであることを示している。ここにオニ次アジア革命の中盤、パオの反映であり、東アジア最後のボナヘルテラスト体制であるカンボジアのシアヌーク体制は崩壊したのである。

しかし、全く当然のことながら、このロン、ノル、シリク、ヌタクカイルイ政權は全く大衆的基盤をもつことなきなつた。アメリカ帝國主義とインドシナ土着反革命勢力は、必然的にもこの

絶望的な道を更に押し進めざるを得なかつた。帝國主義にとつて残された道は、最後の力をふりしぼつて再度全面的介入する以外にはなかつた。このようにして、アメリカ帝國主義は中南米への全面的介入と北爆再開に踏み切つたのである。

かくして、インドシナの一連の事態の経過は明らかに革命の側のイニシアティブの下に進行していることを示している。このことの必然的結果として、中南米の國家中國の決定策は當面ますますインドシナ人民の斗争支援を表明せざるを得ない。しかし、このことは米東部諸國が東アジア植民地革命の永續的發展の路線のイニシアティブを自ら積極的に持つてゐることを示して意味するものではない。中國も米東部諸國は、ベトナム革命の当初から、中南米と全面的にベトナム革命の側に動員することを一貫してバタヴィジュレつてきた。彼等は自らの核武装を背景にして、ベトナム革命によつて切り開かれた有利な力関係を背景にして新たな米中平和共存体制の展望を保持し続けている。このような新米中平和共存路線は、東アジア革命の永續發展を結局中間的段階に固定させる以外のものではない。えなり、かくして米中平和共存路線を打ち破る力は、中國國家自身から出てくるのではなく、この決定権は基本的にインドシナ革命にゆだねられてゐる。

インドシナ人民會議に代表される全インドシナ統一反帝武装勢力がインドシナ全土着反革命勢力とアメリカ帝國主義との全面的対決へとインドシナ階級斗争はさらになりつづける。インドシナ半島においては、今や革命と反革命の苛シな争ひ以外の一切の中間的道は存在しない。インドシナ人民會議、アメリカ帝國主義と土着反革命勢力の一切と全インドシナ半島から一掃するまで争ひ抜くであろう。

インドシナ革命と連帯して 中南米反革命勢力を打破せよ！

東アジア反革命軍事帝國主義体制のもう一つの重要な要素は、朝鮮半島と沖縄に上日本を縮小極東アジアである。この極東反革命軍事和造は、中國、北朝鮮、南朝鮮國家に対する包圍網の一環であると同時に、インドシナ反革命の強力な後方基地として作用している。日米共同声明と沖縄の22年帝國主義的返還こそは、東アジア軍事帝國主義体制の最終の架かりを立て直すべく日本帝國主義とこの極東地域に動員することである。明らかに、日本はこのインドシナ革命の前進のテンポに不安を打たれてゐる。はたして、日本主流の東アジアの反革命的介入の限定のコースを後戻りするとは絶対にあり得ない。日本帝國主義は更にアジアへの積極的介入のイニシアティブを得ないだろう。日本はそのテンポを東アジアの革命と反革命の齒の間に更に深く巻き込まれるを得ない。

かくして、日本帝國主義は、米軍の力、中南米の介入と北爆再開の支持を表明し、アジア會議への参加を表明した。この「斷固とした」「積極的」姿勢に、我々は日米共同声明以後の日本の路線の性格をはっきりと読み取ることをできる。

この會議こそ米帝のインドシナ全面的介入をバツグンに示し、帝國主義の側の東アジアにおける政治的包圍網の再編成を目指す反革命會議以外の何物でもない。

昨年十一月の斗争、今年の四月沖縄斗争を戦い抜いて来た全關西の労働者、學生、高校生諸君、米軍の力による侵略、北爆再開を粉砕し、アジア會議を粉砕し、インドシナ革命と連帯する大家斗争を全面的祖述に直ちに着手せよ。勿論このような新たな斗争の展開は、一昔前の平和主義的な反戦斗争の再度の復活を目指すこととは絶対にあり得ない。我々のこの新たな大家斗争の中に、極東反革命軍事体制打倒、沖縄労働自治政府樹立の基調を貫き通さなければならぬ。インドシナ革命と連帯する唯一の道は、南朝鮮、沖縄人民と連帯して、極東反革命軍事体制を打倒することである。米帝のインドシナ全面的介入は、沖縄人民に沖縄軍事基地の撤去という幻想を最終的に打ちくちぎるにちがいない。我々は再度の沖縄斗争の前進を勝ち取るべきである。

インドシナ革命のその前進の度合に応じて、アメリカ合衆國國內の反戦斗争は更に前進してゆく。既に全米各地で學生を中心とした激しい大学占拠、街頭斗争が展開されている。米帝國主義者はこの斗争に対して凶暴な弾圧をふるい、オハイオ州セント大学で4名の學生を射殺した。アメリカMCC(全米學生動員委員會)は五月九日全關西に作作的な大家斗争を準備している。このアメリカ人民と連帯して、直ちに新たな大家斗争を振り起し、反戦斗争を展開しよう。我々もこのインテリゲンチヤは、米帝國主義と、労働者、農民、学生、市民の全關西と一丸となつて、アメリカ帝國主義に最後の鉄槌をくだすであろう。

インドシナ革命と連帯して 中南米反革命勢力を打破せよ！

- 全米インドシナ統一反帝武装解放斗争勝利
- インドシナ反革命政府打倒
- インドシナ中立化案粉砕
- 極東反革命軍事帝國主義体制打倒
- 軍事基地撤去と地帯還
- 沖縄労働自治政府樹立
- 沖縄の帝國主義的本土化粉砕
- 自衛隊、機動隊の沖縄導入阻止
- 朝鮮統一革命万歳、朴正煥、在韓米軍撤去
- アジア反革命同盟打倒
- 米安保粉砕
- 極東革命勝利、日帝打倒